THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 7

学校教育目標
自ら学び，心豊かにたくましく国際社会を生きぬく児童生徒の育成
合い言葉：自立・貢献

２０２１(令和３)年
月１日発行　ロンドン日本人学校
令和３年度 第４号

歴史を創る

校長　石山 秀樹

…三つ目は、声かけが大事だと思いました。アクティビティーに行くと中の並び方の声かけ、励ましの声かけ、ポイント、英語の翻訳の声かけ、時間の声かけ、食事のマナーの声かけが PGL では日常的だったと思いました。声かけがないと、どれくらい並ぶのに時間がかかったのだろうか。困ってうろうろしている人がどれくらいいたのだろうか。このことを考えて、私は声をかけるということは、仲間との団結力、自分達一人一人の成長につながっていたと思いました。…（小 5A　池田七翠）

…二つ目は、協力と似て助け合いです。だれかができなかったり、届かなかったりしたら、みんなが助け合いをし合ってとても心に残りました。分からないところがあったり、だれかが困っているときは、助け合いをしている人が多かったので、それも心に残っています。みんな、おうえんもし合っていいと思いました。…
（小 5A　マブロミカリス足立響）

…二つ目は「カンシャ」です。ぼくは、行けるのがあたりまえ、できて当然と思っていました。しかし、閉会式で先生方が言っていたように、キャンプファイヤーは教頭先生がうらでお願いしていてくださったり、しおりを作ってくださったり、けがを治してくださったりと、見ているうちに何か自分の知らない感情がうかびあがってきました。それが「カンシャ」でした。ここで本当の感謝に出会ったように思います。…（小 5B　永山颯馬）

…二つ目は笑い声です。2日目のレクリエーション大会のときは、たくさんの笑い声に包まれていてとても幸せでした。負けてくやしかったけれど、みんなの笑い声で自分も笑って大きな体育館が笑いに包まれたときは本当に幸せでした。…（小 5B　中西玲仁）

これらの文章は、小学部 5 年生が 2 泊 3 日の「自然体験教室」を終えて書いた「PGL をふり返って」の内容から、了解を得て抜粋したものです。

自然体験教室は学年の取組ではありますが、本校としてもコロナ禍を経て復活させた大型行事の第１弾となりました。先月号の学校だより「『貢献』の復興」で書いたとおり、この抜粋したほんの一欠片の文章の中にも、児童の「学び」が表現されています。この「学び」は、家族ではない仲間と３日間を共に過ごし、一緒に食事をし、笑い合い、励まし合いながら身体を使って様々な活動に取り組む中でしか体得できないものです。このような学びの集積が「成長」となり、やがて子供達の将来の人生において、活きて働く力になっていくと私は考えています。そして次の大型行事は、もちろん７月１０日の第４４回運動会です。全校児童生徒が織り成す勝負、ドラマを楽しみにしています。

創立記念日に寄せて

さる６月１８日(金)は、本校の「創立記念日」であり、ロンドン日本人学校は創立から４５周年を迎えました。私は、これを機に本校の歩みを振り返ろうと、校長室に保管されている古い資料に目を通しました。幾つかの内容を紹介します。

今を遡ること５６年前の１９６５年（昭和４０年）９月、本校の前身である、日本クラブ主催の「日本語会」が発足しました。”Convent of Ourlady of Sion”という学校を間借りし、現在の補習授業校と同様に土曜日に国語の授業のみを行っていました。７０名の生徒と４名の教師で始まったこの会は、日本経済の興隆に伴って着々と生徒数を増し、さらに他の学校を借用したり、大使館の一部をお借りしたりしながら規模を拡大し、１９７５年（昭和５０年）には５００名を超える生徒を擁するまでになりました。

日本式学校教育熱の高まりを受け、この頃、日本国内と同等の日本の教育を英国で実現するため、日本クラブ主導による全日制の開設が決定されました。１９７６年（昭和５１年）４月には日本政府から初の派遣教師６名が着任、続く６月１８日には英国政府当局から私立学校としての認可を受けました。この日が、現在に至る本校の創立記念日とされています。

実際の開校は、１９７６年（昭和５１年）１０月２日(土)、開校式・入学式・始業式は、当時間借りしていたアメリカンスクール講堂で行われました。当面は仮校舎として小学部は日本クラブ校舎で、中学部は大使館広報センター校舎で授業が開始され、当初の児童生徒数は、小学部は４～６学年のみの募集で児童数５４名、中学部２５名、計７９名での開校でした。この開校に備え、１９７６年（昭和５１年）９月に行われた「召集日」の保護者

向け資料には、次のような記述があります。

「…仮校舎のため、各教科とも教材・備品が十分ではありません。理科室等の特別教室が全くありません。運動場がありません。…」

今の私達から見れば、正に無い無い尽くしですが、逆に私は、そのような中でもこのロンドンでなんとか日本の教育を実現していくという、当時の関係者の方々の熱意を感じました。

[第１回卒業予餞式]

もちろん、このような不便を放置していたわけではなく、開校と並行して在英の日系銀行をはじめとする日系企業、在ロンドンの日本人の方々、日本政府等から資金を集めて旧カムデン校舎を準備し、１９７７年（昭和５２年）４月より「立派な校舎のある学校」となったのです。この旧カムデン校舎は、校歌に登場するリージェントパーク、小学部低学年が写生会で訪れるロンドン･ズーの

すぐ東隣にありました。現在は“North Bridge House Prep School”となり、現在も当時と変わらぬ校舎が見られます。

そこから８年、児童生徒数は開校当時の７倍近い５４３名を数え、手狭な教育環境を改善するために再び校舎移転…現アクトン校舎の購入が決議されました。日本クラブ及び日本人学校理事会による募金委員会が結成され、日本政府の援助も受けて校舎購入と増改築が進められました。当時の資料では、応募寄付額¥1,077,749,600 と £10,333、政府補助金は¥252,750,000 と記され、多額の資金を集めてこの校舎の整備が進められたことが分かります。多くの方々による様々な援助をいただいて、１９８７年（昭和６２年）３月、ロンドン日本人学校は、このアクトン校舎に移転してきたのです。

ロンドン日本人学校のシンボルでもある本館校舎は、よく知られているように長い歴史があります。本館校舎は今から１２１年前の１９００年、”Haberdashers’ Aske’s Acton School”という、女子校として建設されました。この学校は移転しましたが健在であり、学校の Web サイト (https://www.habsgirls.org.uk/about/history-and-tradition/)には、本館校舎の昔の画像があります。校長室に保管されている、今から３０年余り前に活躍された本校派遣教師 国嶋 信 氏 の著書「日本人学校のある町 イーリングの歴史」には、このハバーダッシャーズ時代の学校のことも綴られていました。イーリングの１８００年代中頃の地図を見ると、このあたりは一面の畑・牧草地です。青々とした野原に忽然と赤煉瓦の校舎が建ち上がった様子を想像できるでしょうか。この学校の建設当時、また、日本人学校となってからの中学部棟建設時にも石器時代の遺跡が発掘されたということですから、大昔から住みやすい土地であったのかもしれません。

[１９８５年の校舎購入視察時 校庭から見た校舎]

語ると尽きませんが、本校の４５年間の歴史の一端を御紹介しました。私達の毎日の学校生活は、このようなロンドン在住の日本人をはじめとする多くの先達の熱い思いと貢献に繋がっているものです。そして、冒頭で紹介したような現在の児童生徒皆さんの活躍がその上に積み重なり、やがて新たな「歴史」となっていきます。私は、次の５０周年、１００周年へと、この思いを繋いでいきたいと思っています。